知的障害・発達障害を持つ在職者向け定着支援プログラムの実施を通じて
～３年間のまとめと外部機関との連携について～

○松村 佳子　（社会福祉法人武蔵野 武蔵野市障害者就労支援センターあいる）
竹之内 雅典（NPO法人障がい者就業・雇用支援センター）

１　はじめに

特別支援学校等を卒業後に就職をする知的障害や発達障害をお持ちの方の中には、就職がゴールになってしまい「働くこと」への理解が深まらないまま社会の枠組みの中に押し出されてしまったり、入職後は働き続けるために必要な研修や学習の場が得られにくいという課題がある。そのため職場での不適応の原因となったり、就労継続へのモティベーションの低下に繋がっている可能性がある。

そのため、当あいるでは、①働く力の醸成（コミュニケーションのとり方、働くことの意味、チームビルディング）、②将来の暮らし方、③地域の仲間作りを目的として、外部講師（企業出身者で在籍型職場適応援助者有資格者）の協力を得て、企業のノウハウ・目線を活用した職場定着プログラムを実施してきた。これまで平成29年度から令和元年度の３年間に１回ずつ、平成30年度にステップアップ版を１回実施した。令和元年度に関しては、新型コロナウイルス感染拡大により一部の開催が令和２年度にずれ込んだ。

これまで、平成30年に本職リハ研究発表会にてポスター発表、令和元年に口頭発表を行ったが、本発表では引き続き令和元年度の内容及び３年間のまとめ、今後想定される企業や医療機関との連携の足がかりについて報告をする。

２　実施内容

⑴ 参加者

本プログラムでは、特別支援学校等を卒業し企業就労した登録者と勤続年数にかかわらずケース担当者から推薦のあった者とした。表１に３年間の参加者計31名の属性を示す。

表１　３年間の参加者属性（31名）

	10代	20～25歳	26歳以上
手帳の種別（人）	精神（2） 知的（4） 重複（1）	知的（14）	知的（10）
平均勤続年数	1年	4年	7年

⑵ 日程と内容

日程と内容を表２、写真１・２に示す。

⑶ 実施にあたっての工夫

３年目に当たる今回も、２年間の効果確認を基に基本を変更することなく実施した。

事前に参加者の特性と勤務先の職場環境や強みと課題等を十分に把握したのち、各人が協力して進められるようにグループ構成を工夫するとともに、振り返りシートも各人の障害特性に合わせる形で自由記述、選択方式など複数種類を用意した。また、進め方も各グループにファシリテーターとして職員を配置し随時アドバイスを行うとともに、３回を通じて内容が深まっていくように各回冒頭で前回までの振返りを実施し各ステップの連続性の理解を深めた。

さらに令和元年度の３回目については、新型コロナ感染拡大の影響もあり開催までに大幅に時間が空いてしまった。そのため、緊急事態宣言下での過ごし方やコロナ禍での生活や働き方について皆で話し合う時間を別枠で用意し、不安や想いを共有するようにした。

表２　本プログラム内容３回連続（土曜日実施：１回４時間）

一日目（1月25日）	二日目（2月15日）	三日目（7月18日）
「働くこととは」 ・人は何のために働くのか？働くことの根本的な意味にグループワークを通じて気づいていく	「チームビルディング」 ・ワークで組織を体感し、組織の一員として働く意味をグループワークで深めていく	「長く働き続けるためには」 ・定年を迎えた企業人の職業生活を聞き、自分たちの将来を想像し、働き続けるために必要な事を話し合う
＜1日の流れ＞ ・参加者自己紹介 ・ワークシート記入 ・講演「働くこととは」（コミュニケーションワーク実施含） ・ワークシート記入 ・グループワーク 「自分にとって働く事とは」 「働く時に大切にしている事」 ・発表 ・次回のインフォメーション	＜1日の流れ＞ ・前回から気がついた事個別発表 ・ヘリウムガス棒ワーク ・インダビュー 「チームワークはなぜ必要？」 ・グループワーク 「チーム表作成」 ・ワークガイダンス ・紙のタワー作成ワーク（作戦会議＋試合） ・振り返り感想発表 ・次回のインフォメーション	＜1日の流れ＞ ・前回の振り返りと参加者の発表 ・ワークシート①記入 ・コロナ禍の中で感じた事等フリートーク ・講師との座談会（楽しかったこと・苦しかったこと） ・ワークシート②記入 ・グループワーク 「長く働くために必要なこと」 ・発表 ・ワークシート③記入 ・プログラム最後のまとめ

写真１　グループワークの様子とヘリウム棒ワーク

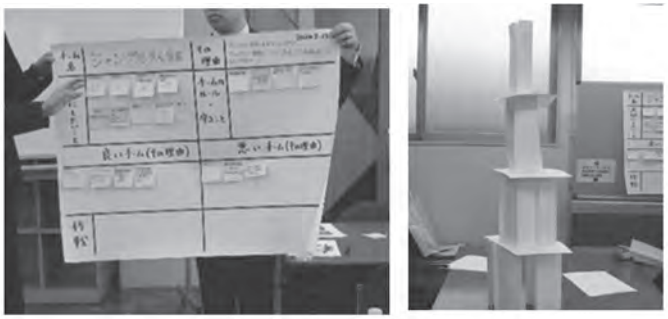

写真２　成果物発表の様子とその後協力して作成した紙のタワー

３　結果

各回の振り返りシートの記述を抜粋し表３にまとめた。

見て取れるように、一人一人の気づきが自分の言葉で書かれている。そこには、働くことの本質を理解した内容、チームワークの大切さの理解と今後の心がけ、他者と関わりながら一つの事を成し遂げた時に感じる他人への信頼感や自分への内観が記載され、行動変容と成長への意欲を感じさせる。

また、プログラムのテキストをみた企業担当者からは、自社の取組と同じような話を他で働くメンバーとともに研修してもらってありがたいという連絡や、自社でも研修等に活用したいので詳細を教えて欲しいという話を自然発生的にいただいた。また企業の広報誌でも紹介していただいた。

さらには、参加者達が通院している医療機関からもプログラム終了後の通院時の様子を情報共有していただき、参加者達の新たな側面を知ると同時に有意義な知見をいただくなど、新たな展開を得ることが出来た。

表３　振り返りシートより抜粋（令和元年度）

第1回目 「働くこととは」	・一人だけじゃなくて仲間がいるからこそ協力して作業が出来るという事がわかりました。 ・様々なジャンルの仕事をしている人達に私達の生活に感謝する事。 ・いつも行う業務に感謝することをします。
第2回目 「チームビルディング」	・わからないことがあれば勇気をもって相談すること。 ・模造紙を作るときに役割分担という言葉を目標にしたので、会社でもそれを実行したいです。
第3回目 「長く働くために必要な事」	・お互いに信頼関係を保って信頼される人間になる ・あきらめずにがんばる事を見習いたい。 ・私がやろうと思わなくても誰かがやってくれる。信頼する、チームワークの大切さ。 ・仕事をしていて新しい発見が出来たらいいな。
3回を通じて変化した事・勉強になった事	・自分には謙虚さがなかったと気がついた。 ・自分の意見を出せるようになった。 ・会社のルールを守る事が大切。 ・周りとより仲良く出来た。
コロナの前と後で変わった事（働く気持ち等）	・気持ちは不安だったけど、少人数制になったので働きやすくなった。 ・特になし（通勤が少し不安だった）。 ・消毒液があったりマスクをしたり職場のルールが変わって大変だったり、仕事の量が減ったりした。
次にやってみたい事	・あいる登録者の講演会。 ・人間関係の対処法の共有。 ・新しい仕事への挑戦をしてみたい。

４　考察

本プログラムは、企業の新人研修等で使用されてきたプログラムを、伝わりやすい言葉や構造化された資料等を用いて知的障害や発達障害に配慮した形で１回を３日間１クールで実施している。実施３回目となる令和元年度は新型コロナウイルス感染拡大のためプログラム最中に中断したが、どうしても最後までやりたいという参加者の声で完結できた。時間を経ての再開と感染症対策で様々な制約があったが、参加者達の態度は非常に前向きなものが見られていた。

令和元年度参加者に関しては、１クール３回ともGW時のリーダーが同じであった。回を重ねるにつれチームとしてまとまりGW時の運営もスムーズにいくようにはなったが、参加者が様々な経験が出来るような働きかけも必要であったように感じている。

さらに今回は雇用主や医療関係者からフィードバックをいただくことが出来たが、それは参加者達が自ら職場やクリニックでテキストを見せたり、自分たちの気づきを報告するといった行動があったからである。本プログラムが、参加者達の内的な部分に良い刺激を与えた証左であろう。

過去２回の実施で雇用主との情報共有が進んでいない事を課題として挙げていたが、今後はアプローチの仕方を工夫していかなくてはいけないと改めて考えさせられた。

５　まとめ

平成29年度から３年間にわたり計31名の登録者と一緒にプログラムを作り上げてきた。当初の予定では、特別支援高校等を卒業して間もない登録者をメインターゲットとしてきたが、回を重ねるにつれて年齢層の高い登録者に対する有効性も見えてきた。社会人経験の差によって参加者達の気づきはそれぞれであるが、振り返りシートを見ていくと、「働くことの意義を見つける」「組織の中で働くことへの理解」「自分の未来に想いをはせる事」等が自分なりに生まれた事が見て取れた。

さらに参加者同士の交流がはぐくまれ、参加者達が当センター主催の交流会に積極的に参加するようになるなど、当センターを中心として仲間づくりの素地も生まれている。今後は参加者が主体的に活動できるような働きかけや地域の情報提供も必要であると考える。

令和元年度は、企業や医療機関と本プログラムを通じての関りが出来た年であった。今後は、会社訪問や通院同行を通じての情報共有を進めると同時に、課題を共有しながら連携のネットワークを広げていきたい。

また、これまでの結果を通じて、本プログラムのような手法が多方面で模索を続けている「定着の課題」に対して一つの有効な定着支援プログラムとなることを確信した３年間であった。

【連絡先】
松村　佳子
武蔵野市障害者就労支援センターあいる
e-mail：ill6@lake.ocn.ne.jp